探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：甲山中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
世羅町立甲山中学校	6	１１８
世羅町立甲山小学校	9	１４３
世羅町立せらひがし小学校	9	１３０

（R5. 3. 3現在で記入）

１　指導上の課題

本校区では令和３年度から，研究主題を「地域の未来を見据え，探究的に学習する児童生徒の育成～ＰＢＡ（プロジェクト型アプローチ）による生活科及び総合的な学習の時間の単元開発を通して～」とし，本質的な問い「世羅をもっと元気にするためには？」のもと，試行単元やルーブリックの開発・実践に取り組んできた。

これらの取組により，各校における生活科及び総合的な学習の時間の充実や，児童生徒の自発性やコミュニケーション能力といった資質・能力の向上等の成果があった。

一方，探究的な学習の過程について意識的に指導を行っている教職員が少ないことや，開発したルーブリックが児童生徒の実態や発達段階に合っていないといった課題が残った。

２　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

令和４年度は研究テーマを「地域の未来を見つめ，探究的に学習する児童生徒の育成～経験単元の開発・実践と評価の工夫を通して～」とし，小中９年間の総合的な学習の時間及び生活科において，教師及び児童生徒が探究の過程を意識して学ぶ探究課題の内容や評価方法について系統性をもたせた教育活動を展開し，「持続可能な社会の形成者」として地域社会で活躍する人材を育成することをねらいとして研究を進めた。

（２）資質・能力の設定について

本校区では，令和３年度より児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を次の２点に重点化し，校区で共有して研究に取り組んでいる。

①自発性（自ら課題を見つけチャレンジする力，自ら学習の進捗管理をする力）
②コミュニケーション能力（伝える能力，受け取る能力）

令和４年度はこれらの力の育成を図るため，次の３点について校区内で共通理解を図り，実践した。

①児童生徒に発達段階に応じた学習計画表を作成させ，自己調整による学習に取り組ませることで，自発性の育成を図る。
②単元の適切な箇所で多様な他者とのコミュニケーションの場面を設け，コミュニケーション能力の育成を図る。
③定着度を児童生徒が自己評価するためのルーブリックの工夫を行い，児童生徒の資質・能力に係る変容を適切に見取る。

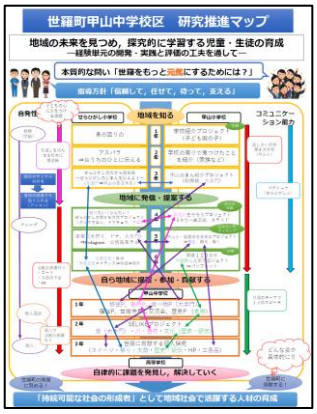
（３）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

令和３年度に開発した試行単元を基に，新たな経験単元の開発及び実践を行った。１年間で校区の全学年が１単元以上を開発・実践した。以下はその例である。

甲山小学校第5学年	世羅町の人口を増やそうプロジェクト
せらひがし小学校第1学年	とっておきのしゃぼんだまを作ろう！
甲山中学校第1学年	福祉プロジェクト ～世羅町の高齢者を元気にしよう～

【小中連携の取組】



令和３年度の研究推進方針を基に，新たに「信頼して，任せて，待って，支える」というマインドセットを加え，小中学校の全職員が理想を共有することで，各校が同じベクトルでそれぞれの実態に合った研究を進めることができた。

また，年間４回の研究推進地域協議会では，「甲山中学校区研究推進マップ」を作成しながら協議を行うことで，各校の取組の進捗状況の確認とともに，学校を超えたカリキュラム・マネジメントの工夫や指導の系統性についての客観的評価を行うことができた。

【資質・能力の評価】

昨年度作成したルーブリックを基に，小学校から中学校への発展性等も踏まえ，それぞれの校種ごとにルーブリックの改善を図った。改善にあたっては，全職員，児童生徒間で共有することを前提とし，次の３つの視点で見直しを行った。

①できるだけ簡潔，明瞭にすること
②どの単元にでも活用できるようにすること
③子どもにもわかる言葉で指標を設定すること

また，発達段階によっても児童生徒が適切に自己評価を行うことができるよう，低学年のルーブリックにはイラストを入れてわかりやすくするなどの工夫も取り入れた。

３　実践事例

【探究的な学習の充実に向けての取組】

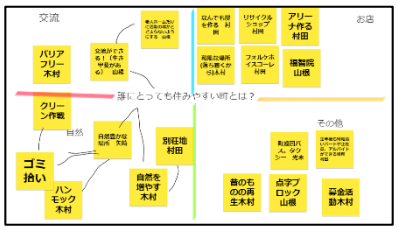
今年度開発した試行単元の紹介
甲山中学校第１学年
『福祉プロジェクト～世羅町の高齢者を元気にしよう～』

この単元では，世羅町の少子高齢化という点に着目し，高齢者の方を元気にすることで，本質的な問いの解決に繋がると考え，単元を構想した。

①課題設定

「高齢者にとって住みやすい町とはどういった町だろうか。」

問いについてブレインストーミングを行い，生徒自身の興味・関心に基づいた課題を設定した。



単元の計画段階では世羅町の魅力を発信するという観点から探究課題を設定していたが，第１学年対象に行った福祉体験学習を通して，生徒の身近な存在である「高齢者」に焦点をあてて考え

始めた。生徒たちが世羅町の人口構成に注目して調べていくと，世羅町の高齢者の割合は今後も増加していくことが分かり，高齢者を元気にすることが，世羅町を元気にすることにつながると考えた。そこで，単元計画を作り直し，生徒とともに「福祉プロジェクト」を立ち上げることとした。

②情報収集「世羅町の地域福祉の現状はどうだろうか。」

活動方針を決定し，世羅町の地域福祉について情報収集を行うなど，基本的には生徒の主導で学習を進めた。教師はファシリテーターとして問いかけを行ったり，社会福祉協議会との渉外といったサポーターとしての役割を担った。

③整理・分析

「福祉体験学習で学んだことを何にどう活かしていけばよいか。」

福祉体験学習の講師をしていただいた社会福祉協議会の職員の方のご協力のもと，サロン交流会を２年ぶりに開催することになった。福祉体験学習で学んだことをサロン訪問という形で表現してほしいという旨のビデオレターを視聴させ，生徒へ活動の必然性をもたせた。必然性を感じた生徒は自己肯定感が高まり，主体的に，サロン交流会へ向けて計画立案する姿が見られるようになった。

社会福祉協議会の久保さんからのビデオレター

④まとめ・表現

「今まで企画してきたことを充実させるにはどうしたらいいか。」

本プロジェクトの最後に，まとめとして「甲山愛楽サロン」の会員を相手にサロン交流会を行い，社会福祉協議会の「福祉体験学習で学んだことを活かして高齢者の方と交流してほしい」という願いについて地域に貢献することができた。交流会当日は，今まで企画したことをもとに高齢者の方と交流ができた。企画した通りに進んだグループもあれば，活動が早く終わったり，思いのほか活動が盛り上がらなかったり，自分たちの「思い通り」にならなかったりしたグループもある等，それぞれ課題も浮かび上がってきた。生徒一人一人の見取りを行うと，今まで学習したことを活かして，高齢者の方と同じ目線になるように姿勢を低くしたり，大きくはっきりとした声で話したりと相手意識をもちながら活動をしている生徒が多かった。教師も介入したい気持ちを抑えながらも，「信頼して，任せて，待って，支える」ことを胸に必要に応じてファシリテーターとしての役割に徹した。当初の予定ではサロン交流会を２回行う予定だったが，悪天候のため１回のみの開催となった。

【個に応じた指導の充実】

前述の単元のように，できるだけ児童生徒に主導権をもたせ，自ら地域にかかわり，提案参加・貢献するということを意識した単元づくりを行った。児童生徒に任せることで，毎回，授業のたびに単元計画を変更していく必要があったり，計画以上に時間がかかったりと壁も多くあったが，任せているからこそ，児童生徒が自分事として考え，本気で活動する姿を見ることができ，地域貢献を考える総合的な学習の時間になったと感じている。

４　研究の成果と課題等

（１）成果

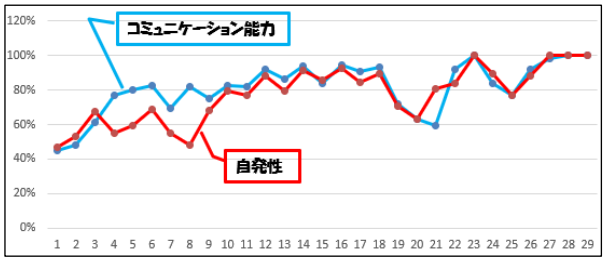
下の表は総合的な学習の時間に関する教員アンケートの結果について，令和３年度と令和４年度の同時期を比較したものである。

設問	年度	当てはまる	どちらかといえば，当てはまる	どちらかといえば，当てはまらない	当てはまらない
「総合的な学習の時間」及び「生活科」の授業では，課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしていますか。	R3	23%	68%	9%	0%
	R4	46%	37%	17%	0%

「当てはまる」と回答した教員の割合が大幅に増加した。探究的な学びの在り方について，その都度振り返りを行い，共通理解を図ったことによりこの結果につながったと考える。

（２）課題

下のグラフは生徒の資質・能力に関する自己評価におけるS評価とA評価の割合を，時数経過とともにグラフに表したものである。グラフの振れ幅は50～100%の間であり，単元の後半では８割以上の生徒がS評価またはA評価としている。振れ幅が少ないことについては，生徒が常に自身の資質・能力の高まりを感じていると言える一方で，課題設定が甘くなってしまい，生徒がその課題を解決する難易度も低くなっているとも言える。また，資質・能力の高まりについては，生徒の捉えと教師の捉えに乖離がある。



（３）今後の改善方策等

以上の成果と課題をもとに，次年度以降に向けて重点的に取り組んでいく項目は次の４点である。

①各学年に所属している探究的な学びを担当する教師（研究部員）が率先して各学年の単元開発を行えるようにする。

②全職員が探究の過程や育てたい資質・能力を意識して，単元を開発・実践できるようにする。

③ルーブリックの内容について，実践を踏まえ，より児童生徒の実態に合うよう，観点の数の調整や，学年間または校種間で評価規準に重なりがないようにする等の工夫をする。

④単元構想については，校種間で開発する単元の探究課題や，単元構成について連携を密にし，児童生徒が同じ内容に何度も取り組むことがないよう，カリキュラム・マネジメントを行う。

次年度は今年度の取組を見直す段階と捉え，本校区の方針について全職員が共通認識をもった中で，固定概念に捉われない，柔軟な発想で，また新たな実践を行っていきたい。